

# 山田線の1日も早い復旧を

宮古—釜石間

沿線4自治体がシンポ

東日本大震災で甚大な被害を受け、運休中のJR山田線の宮古—釜石間（55・4キロ）の早期復旧を訴えるシンポジウム「みんなで考えるJR山田線の復旧」が11月9日、宮古市河南の岩手県立大宮古短期大学部で開かれました。



レールが寸断されたままのJR山田線の線路（本町長崎）

したが、JR側は一貫して高速バス輸送システム（BRT）による代替交通を提案しています。

4自治体は山田線が通学・通院など地域の市民生活に欠かせない交通機関だと認識。BRTのルートは国道45号との共用や遠回りで定時性などに問題がある△BRT整備の多大な経費・時間を鉄道の本格復旧

本町・宮古市・大槌町・釜石市の沿線4自治体などから住民ら約230人が参加、課題である復旧後の利用促進の方策などについて共に考えました。

シンポは4自治体の主催。同区間の被災範囲は17キロ・80カ所に及び、本町では陸中山田駅や織笠駅の駅舎などが津波で流されました。4自治体は平成23年9月以降、JR東日本や国に対して早期復旧を要望してきました。



山田線の必要性を訴える木下さん

また、4自治体の住民代表が意見発表を行い、本町からは自営業の木下志き子さん（65）が登壇。「山田線は生活の一部。来年4月の三陸鉄道の全線復旧と併せ、山田線が復旧すれば内陸との循環も再開できる」と期待を込めました。大槌町の県立大槌高校の生徒3人は運休の影響で進路選択の幅が狭まっている現実を語り、「今の小中学生に自分たちと同じ思いをさせたくない」と語りました。

Rの提案に難色を示しています。シンポで講演した東京工業大学院の屋井鉄雄教授（環境交通工学）は「山田線が地域にとって本当に必要かをとことん議論し、存続させるなら利用するほかない」と指摘。「事業者任せにせず、『おらが鉄道』の意識を持たねば」と述べ、住民の自觉を促しました。

交通ジャーナリストの鈴木文彦さんも、存続に向け「観光客に頼るだけでは駄目で、基盤は沿線の生活利用」だとして、鉄道とバスの役割分担を図り、通学者や高齢者に配慮した鉄道を目指す必要性を強調。さらに無人駅の美化活動など地域住民による支援の実例を紹介しました。

## 「山田線は生活の一部」

# 交通事故が多発しています！！

## 県下交通死亡事故多発警報発令！

町内では、10月26日に道路横断中のお年寄りを自動車がはねるという痛ましい死亡事故が発生していました。これにより、町内における「交通死亡事故ゼロ」が1,491日でストップ。さらに4日後の10月30日には車4台が絡む事故が発生し、4人の重軽傷者を出しています。県内では、10月26日から11月6日の12日間で、町内で発生した事故を含め死亡事故が9件、重傷事故が3件発生したため、11月8日から11月17日までの10日間、県警察本部長から「県下交通死亡事故多発警報」が発令されました。

### ◎安全運転を心がけましょう

年末年始が近付き飲酒の機会が増えるこの時期は、飲酒運転による交通事故が増加してきます。また冬は、積雪や路面の凍結などにより事故の危険性も高くなります。被害者だけでなく、加害者にも悲惨な結果となる交通事故を防ぐため、交通ルールを守り安全運転を心がけ、飲酒運転は絶対しないようにしましょう。



12月1日から12月10までの10日間、「ただいまと家族に無事を おみやげに」をスローガンに、冬の交通事故防止県民運動が実施されます。冬は日が暮れるのが早く、周囲の状況が確認しづらくなります。自動車を運転する人は、歩行者や自転車を気遣う運転を心がけましょう。また、歩行者や自転車も反射材などを着け、車道への飛び出しはやめましょう。

▶運動の重点 ▶冬道用タイヤ装着の徹底 ▶飲酒運転の根絶 ▶スピードダウンの徹底

◆問い合わせ 山田交番（☎82-2155）へどうぞ。